

他者と関わることで自分の考えを確かにできる児童の育成

— 国語科高学年における学習課題解決に向けた話し合う活動の工夫と充実を通して —

利府町立利府第三小学校 高橋 裕子

概 要

本校第5学年の国語科における児童の話し合う活動の実態を、質問紙による意識調査と授業実践の記録から分析し、新学習指導要領の趣旨を踏まえた国語科の3領域の単元の構想と指導計画の作成を重ねた。本研究を通して、話し合う活動が学習過程において学習課題解決の手段として機能するように、指導事項を特化して繰り返し段階的に学習できる単元の構成、言語活動、学習課題などを定める中で、話し合う活動の在り方について考察した。

本研究は、話し合う活動を通して、形成した自分の考えを広げ深める中で、自分の考えを確かにできる児童の育成を目指したものである。

1 主題設定の理由

本町では、「町は一つの学校」という理念のもと、「学校・家庭・地域・行政が一体となり、人や社会とのかかわりの中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考え、将来の社会人としてのよりよい生き方を探求する児童・生徒を育成する」ことを目指している。

本校では、平成29、30年度に「心をみがく」ための指導と「確かな学力」を育む指導の充実を重点として掲げ、2つのテーマで校内研究に取り組んできた。具体的には「学級力向上プロジェクト」という学級集団づくりを中心とした学級活動の授業研究と校内研究教科である算数科の授業研究に全教員で取り組み、成果と課題を共有し、授業改善に生かしてきた。成果としては、他者と関わりながら安心して学習に向かう学級集団が形成され、児童の学習への意欲が高まったことが挙げられた。課題としては、学級活動の話合いや算数科の学び合いに取り組む様子から、その土台となる国語科「A話すこと・聞くこと」領域で学習した事柄が生かされず、学び合いによる思考の深まりが乏しいといったことが指摘された。特に、高学年の児童については、日常生活や学習活動において、各教科等の学習を通して培ってきた伝え合う力を十分に発揮しきれていないといったことも挙げられた。

平成28年12月の中央教育審議会答申には、「対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること」が学校教育を通じて子供たちに育てたい姿の在り方の一つとして示されている。

また、小学校学習指導要領（平成29年告示）の第1章総則の第3の1(2)では、言語能力の育成を図るため、「国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること」としている。国語科においては、言語活動の質を高める具体的な手立てを講じ、全ての教科等の学習の基盤となる資質・能力としての言語能力の向上を図ることが求められている。

本研究では、日常生活や学習活動において、他者と関わることで、自分の考えを広げたり深めたりしながら自分の考えを確かにできる児童の育成を目指し、言語能力の育成の要となる国語科において、新学習指導要領の趣旨を踏まえた単元を構想し、学習課題解決に向けた話し合う活動を取り入れた授業実践とその考察を繰り返すことを通じて、国語科における話し合う活動の指導のポイントを明らかにしようと考え、本主題を設定した。

2 研究主題・副題について

2. 1 「他者と関わることで自分の考えを確かにできる」について

「対話的な学び」における対話の相手として「先哲の考え」が挙げられているが、ここでは、対面

しての話し合い活動を扱うことから、「他者」を自分以外の児童、教師、地域の人などと設定する。

「他者と関わること」を、話し合う活動を経て再度児童同士で話し合うこと、教師の話の聞いたり質問したりすること、学びを生かし地域の人への呼びかけやインタビューをすることと定義する。「自分の考えを確かにできる」は、他者と関わり考えを広げたり深めたりすることで、考えを形成し、その考えを支える理由や事例を挙げたり適切な根拠を示したりし、表現の質を高めることとする。

2. 2 「話し合う活動」について

小学校学習指導要領（平成29年告示）の国語科の内容において、〔思考力、判断力、表現力等〕の領域の一つである「A話すこと・聞くこと」は、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」で構成されているが、それらは相互に密接に関連している。本研究においては、「話し合う活動」を、授業中のペアやグループ、全体でそれぞれの考えを聞き合い、述べ合う活動と捉える。児童が単元を通して、話し合いの仕方や進め方への理解を深め、話し合う活動を通して学習課題に迫れるようにする。

2. 3 「話し合う活動の工夫と充実」について

単元の構想及び指導計画を受けた学習指導案を作成する際に定めた3つの視点から、話し合う活動の組立てや配置の仕方などを配慮する。その視点については、「4 研究の実際」において詳述する。

「繰り返し段階的に」を、単元の構想のキーワードとし、単元の言語活動を設定し、話し合う活動を配置していく。また、単元で学んだことを、次の単元で活用・発揮させ、話し合う活動の質の向上を図るため、単元間での話し合う活動の連続性や発展性を十分に考慮する。

本研究にあっては、「A話すこと・聞くこと」の単元を起点とし、「B書くこと」の単元、「C読むこと」の単元の順に、学習指導案を作成し実践していく。その際、学習指導案の作成・検討は、高学年部共同で行い、2学級で実践し評価と改善を行うこととした。

3 研究の目的と方法

本研究の目的は、他者と関わることで、自分の考えを広げたり深めたりし、自分の考えを確かにできる児童の育成とする。また、児童の実態を踏まえた話し合う活動を充実させるための具体的な手立てを明らかにし、学校全体で共有を図っていきたいと考えている。

この目的を達成するために、次のことを行う。始めに、第5学年の児童を対象とした実態調査を実施し分析する（4. 1）。次に、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学びの実現を図っていくものとしている新学習指導要領の趣旨を踏まえ、指導内容の系統性を把握し、学習課題解決に向けた話し合う活動を配置した単元の構想及び指導計画の作成し、授業実践を行う（4. 2）。そして、本研究の授業実践を生かして、本校の「利府三小スタンダード」の話し合いに関わる部分の加筆修正を提案する（4. 3）。

4 研究の実際

4. 1 実態調査

4. 1. 1 調査の概要

(1) 質問紙（選択式）

目的：授業改善と話し合う活動の工夫と充実の手立てを練るために、各教科等の言語活動についての今年度の本校児童の意識面の実態把握に役立てる。

対象：第5学年児童80名

実施日：令和元年6月3日

内容：平成31年度全国学力・学習状況調査の「児童質問紙」や「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編」を参考にし、国語科の言語活動に関する内容から他教科等の言語活動に広げる形で配列し作成した。質問数は12問とし、選択肢は「当てはまる」「どちらかといえは当てはまる」「どちらかといえは当てはまらない」「当てはまらない」とした。

(2) 観察

目的：授業改善と話し合う活動の工夫と充実の手立てを練るために、国語科の学習時における教師の発問に対する児童の発話記録を取り、今年度の本校児童の話し合う活動の実態を分析し、実際の児童の話し合う活動の課題把握に役立てる。

対象：第5学年2組の内、抽出

実施日：令和元年6月6日

内容：ビデオを3台用意し、1台は教室後方より教室全体の様子を記録し、2台目は教室前方に配置し、教師側から児童を撮影した。3台目は抽出児童の話し合う場面を中心に撮影し、3台目で撮影した様子から児童の発話を文字に起こし、発話記録として分析した。

記録した場面は、学級担任が指導に当たった授業で、「C読むこと」の文学的な文章「世界で一番やかましい音」の全体を三部構成にする学習活動である。

4. 1. 2 調査結果と考察

(1) 質問紙による意識調査の結果（補助資料1）

意識調査の結果を一部抜粋して取り上げ、考察する。

右の帯グラフから、道徳と算数での話し合いやペアでの話し合いに関して、約9割の児童が意欲的に取り組んでいることが読み取れる。一方で、国語の授業での話すことや聞くこと、他の授業での話し合うことや発表することにおいて、課題を感じている児童は約3割である。ただし、質問紙にある、考えを深めるや広げる、あるいは、話の組立てなどを工夫しているについては、それらの質問紙の表現の意味を児童が具体的に捉えられていなかったとも考えられる。

以上の結果から、まず、ペアでは自分の考えを伝えることができていると感じている児童が多いので、互いの考えの発表に留まることなく、協働や対話となる関わりができるよう支援する必要がある。次に、話し合うことに必要な表現を確認し、確実に身に付けさせる必要がある。その身に付けた表現を活用できるように、他にどのような時に活用できるか見通しを持たせる場面を設けていきたい。さらに、考えを深めるや広げる、あるいは、話の組立てなどを工夫していることについて具体的に捉えさせるために、学んだことや身に付けた力、話し合った良さなどについて言語化させる必要がある。

(2) 観察（補助資料2）

物語の全体像を把握するために、構成について児童に考えさせた場面を観察した。三部構成であることは事前に伝え、どの場面で三つに分けたらよいのかをグループで話し合った。

対象となる5年2組の児童のやりとりを発話記録とし、その記録から見えてきた実態と課題を挙

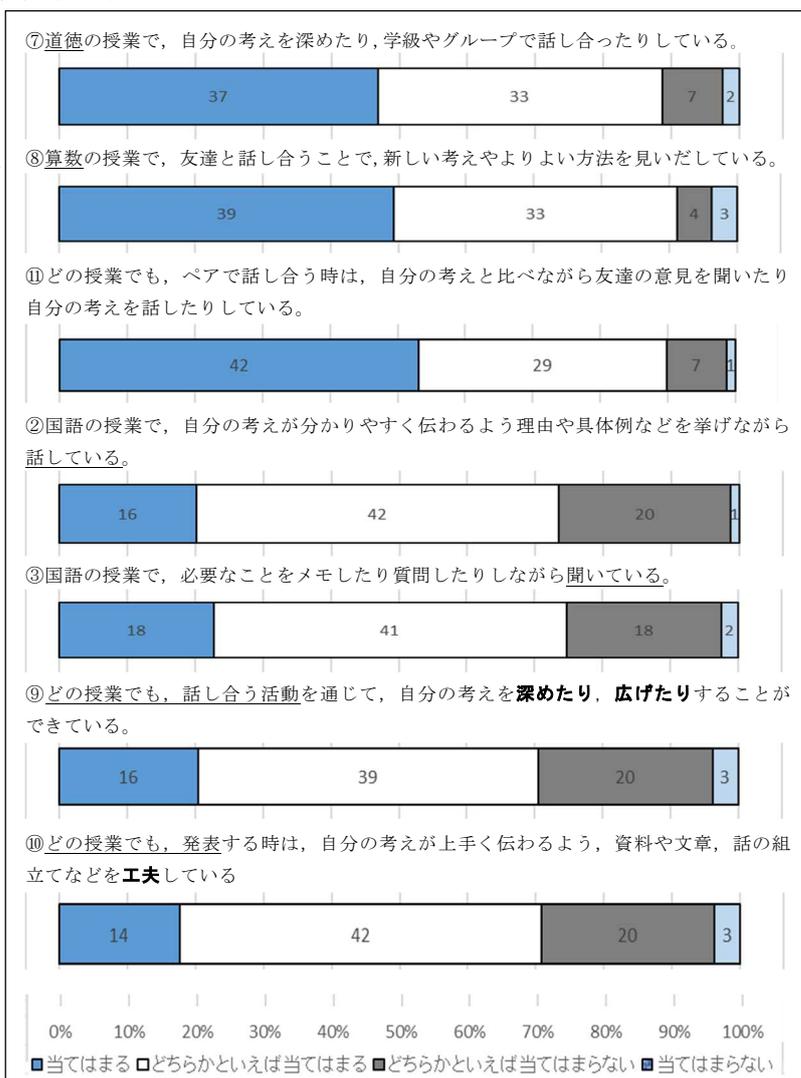


図1 児童の意識調査結果抜粋

げる。

まず、児童の実態としては、教科書の言葉を根拠に話し合えた、話し合うことで自分の考えに自信を持っていた、友達に自分の考えを伝えることができていた、の3つが挙げられる。

次に、課題と考えられる事柄を3つ述べる。1つ目は、これまでの積み重ねから話すのが苦手と感じている児童がいたことから、ペアやグループで話しやすい環境づくりは行う必要がある。一方で、話すことに抵抗が無くても話す内容が思いつかない児童もいるため、学習課題や発問の仕方の吟味、話し合う前にモデルを提示したりこれまで学んだことを整理して示したりするなどの手立てを講じることも大切である。2つ目は、ペアやグループでは話せても学級全体の中では話すことができない児童がいたことから、児童の考えについてペアやグループでの話し合う活動段階でのまとめのさせ方、教師による児童の意見の取り上げ方を工夫する必要がある。3つ目は、同じ意見だったペアは考えの確認で話し合う活動を終えてしまったことから、考えが同じでも話し合う必要性や有用感を持たせる場の設定、意見の深めさせ方などの指導を工夫する必要がある。また異なる意見のペアに変更するなどの意図的な場の設定も必要だと考える。

4. 2 単元の構想及び指導計画の作成

4. 2. 1 所属校での授業実践計画

児童が繰り返し段階的に学習できるよう、3つの単元の構想をし、単元を通して話し合う活動を配置した学習指導案を作成し、所属校にて3回の授業実践を行う。

「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の3領域について、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、単元の特質に応じた単元の構想及び指導計画の作成を行っていく。これにより、各領域における話し合う活動の在り方を探る。

所属校での授業実践①を「A話すこと・聞くこと」、授業実践②を「B書くこと」、授業実践③を「C読むこと」とし、授業実践①から③の順番で授業実践を行う。授業実践①の「A話すこと・聞くこと」で取り扱う言語活動は、それぞれの立場から考えを伝えるなどして話し合う活動自体を学ぶ討論会であることから、互いの立場や意図を明確にしなが、考えを広げたりまとめたりすることを、「B書くこと」及び「C読むこと」の学習の際にも活用したいと考えた。

授業実践①では、実態調査の結果を踏まえ、主たる言語活動とする討論会の前後に話し合う活動を取り入れた「それぞれの立場や役割のスペシャリストになろう」の授業実践を学級担任とT. Tで7月に行う。授業実践②では、話し合う活動により、資料の活用の仕方を検討する「資料を生かしてポスターを書こう」の授業実践を9月に行う。作成したポスターの推敲や共有においても話し合う活動を意識する。授業実践③では、学習課題解決のための手立てとして様々な種類の話し合う活動を試してその有効性を検証したい。表現の工夫に特化した指導が行えるよう、単元を構成した「表現の工夫について考えよう」の授業実践を10月に行う。

4. 2. 2 学習指導案の作成における3つの視点

単元の構想及び指導計画を受けた学習指導案を作成する上で、視点を3つ定めた。

1つ目は「単元の構成と学習過程の工夫」である。単元の目標に到達するのに適した言語活動を設定し、学習過程を工夫した。その際、学習課題解決に有効と考えた話し合う活動を各単位時間の学習過程に配置した。話し合う活動の場面は、効果的な形態や、話し合う内容と方向性の難易度を、単元を通して段階的に高めるよう設定することで、話し合う活動に必要な思考力、判断力、表現力等を児童自らが理解し、取り組めるようにした。

2つ目は「学習課題・発問の工夫」である。学習課題を設定する際は、各単元の目標達成に必要な資質・能力を教師側が意識することが重要である。その上で、学習課題解決に有効だと考える話し合う活動を取り入れる。話し合う際は「何のために話し合うのか」また「何について話し合うのか」さらに「どのように話し合うのか」について理解させるために、発問の仕方を工夫する。学習課題や発問に対し、文字や音声など言語化して一人一人が答えることを経験することで、最終段階に設定した言語活動において自分の考えを表現できるようにする。

3つ目は「話し合うために必要な言葉の提示」である。4年生までに学んできた重要な言葉を一覧表にまとめ、掲示する。単元内で新たに学ぶ言葉に関しては、個人やグループでまとめることで、話し合う際に意識させ活用できるようにする。本研究においては、話し合う活動を4つ（交流、まとめる、広げる、問題解決）に分類し、話し合う活動の前後に提示することで、話し合いの方向性を児童に意識させる（補助資料3）。その際の教師の効果的な働き掛けや声掛けも吟味する。

以上、3つの視点を取り入れ、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、学習課題解決に向けた話し合う活動を配置した学習指導案の作成を高学年部の教員共同で行う。なお、学習指導案には4年生までに身に付けてきた各領域において育成を目指す資質・能力を記載し、指導事項の系統性を意識できる内容となるようにした。

3つの視点を取り入れた単元の構想は次の表のとおりである。

表1 3つの視点を取り入れた手立て

	手立て		
	(1)単元の構成と学習過程の工夫	(2)学習課題・発問の工夫	(3)話し合うために必要な言葉の提示
授業実践①	・同じ立場や役割で討論会を2回行い、その都度、話し合う活動を取り入れ、準備と改善策を練る。	・立場や役割、討論会について理解を深めるために話し合う活動を設定する。 ・立場や役割についての取扱説明書を作成する。	・メモの取り方 ・理由の言い方 ・質問の仕方
授業実践②	・教科書で資料を活用した文章の書き方やポスターの作り方を学んだ後に、インフルエンザの予防を呼びかけるポスターを作成する。	・構成について話し合う。 ・ポスターの作成における資料の活用の仕方について助言し合う。 ・資料の活用の仕方について共有する。	・順序を表す言葉 ・資料を提示する時に使う言葉 ・話し合う活動の四分類 ・質問の仕方 ・推敲(助言)共有の話形
授業実践③	・表現の工夫から物語の全体像や人物像を読み取る。表現の工夫とその効果について解説文にまとめる。 ・クライマックスから物語を読み、物語の仕掛けに気づいたり人物像を捉えたりし、最後に物語の構成を押さえ、全体像を把握する。	・単元の目標達成のため、表現に特化した学習過程とし、表現の工夫や表現の効果について話し合う。 ・表現の工夫について解説文にまとめる。	・児童が読みを深める話し合う活動において、効果的と考えられる教師の声掛けの提案 ・話し合う活動の四分類 ・推敲や共有の話形

4. 2. 3 実践の検証

それぞれの授業実践後は、話し合う活動に着目して分析を行う。毎時間記録する発話記録から、学習過程に配置した話し合う活動の有効性を検証する。言語活動であるポスター、解説文の変容から、学習過程に配置した話し合う活動の有効性を検証する。学習課題解決に向けた話し合う活動の工夫と充実については3つの視点から検証する。

4. 3 利府三小スタンダードの改善

一部（6話形，7話の聞き方，10グループ学習）再考し，加筆修正を提案する。

5 実践検証

5. 1 所属校での実践

所属校での授業実践は、各領域における話し合う活動の在り方を探るために3領域で行った。今年度は新学習指導要領の移行期間であることから、新学習指導要領に沿って目標を設定し、指導内容を決めた。

5. 2 第1回実践検証

5. 2. 1 授業実践①（補助資料4）

単元名は「それぞれの立場や役割のスペシャリストになろう」とした。

単元の目標は次の通りである。

・思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすることができる。 [知識及び技能]

・互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。 [思考力、判断力、表現力等]

・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。 [学びに向かう力、人間性等]

言語活動は、討論会を行うことと、賛成又は反対の立場、司会係や審判係といった役割の取扱説明書の作成とした。教材は「立場を決めて討論をしよう」（東京書籍）である。

対象学級は、本校の第5学年2組40名である。

4年生までに身に付けてきた話し合うことに関する資質・能力は3つある。1つ目は目的や進め方を確認し司会などの役割を果たし話し合うこと、2つ目は必要なことを記録したり質問したりしながら聞くこと、3つ目は話し合うことで、全体の意見や自分の意見をまとめることである。これらを生かしながら、計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりできるようにする。

本実践は、5時間扱いとし、1時間目で討論という話し合いの形態や進め方について理解する。2時間目で実際に討論会を行う上で必要なことを明確にする。3時間目で討論会を行うことでそれぞれの立場や役割を理解する。4時間目で自分の立場や役割を果たせたかを振り返り、それぞれの立場や役割について理解を深める。5時間目で計画に沿って討論会をして、役割や立場の取扱説明書を作成する。繰り返し段階的に学習をすることで、資質・能力を育成できるように単元の構成を組み立てた。

話し合う目的は、それぞれの立場から考えを述べ合い、その考えを基に自分の考えを広げたりまとめたりすることである。ともすると、相手の意見を言い負かすことに重きを置く活動になってしまいがちであることを考慮し、これまでの話し合う活動とは目的が異なることを理解させる必要がある。

5. 2. 2 考察

3つの視点から話し合う活動の工夫、発話記録と言語活動から話し合う活動の有効性を考察する。

(1) 単元の構成と学習過程の工夫

児童は、本単元で討論会という話し合いそのものを学ぶため、討論への理解を深めながら、言葉による見方・考え方を働かせて話し合い、他の場面でも活用できるようになることが大切である。討論会を経験し、討論への理解を深めるため立場や役割ごとのグループに分かれ話し合う活動を行った。

討論の方向性や進め方などを確認した上で、討論会を行い、立場や役割ごとに改善策を練るというサイクルを繰り返した。それにより、児童の発言からは思考力等の高まりが見られた。発話記録（補助資料5）で、討論会の1回目と2回目を比較すると、1回目は進行途中で時間切れとなり終わってしまったが、2回目は最後の判定まで行えた。1回目で相手とのやりとりが上手にできなかったため、グループで話し合った改善策を2回目では実行できた。児童はまず役割分担を行い、次に個々に主張するのではなく、グループで意見を3つにまとめてから主張した。一方で、主張や質問などの内容の吟味までは行えず、話し合う内容を焦点化し明確に認識させる必要性を感じた。

児童の振り返りからは、学習活動を通して話し合う必要性を強く感じた児童がいたことが分かった。一方で、討論会における基本的な話し合いの仕方の押さえが足りず、討論への理解が不十分のまま授業が進んでしまった児童もいた。学習の基本的な内容を押さえる指導の比重は実態に応じて配

慮していく必要がある。

(2) 学習課題・発問の工夫

論題の妥当性を検討する必要がある。話しやすいよう身近な事柄である「国語よりも算数の方が大切である」を1回目の論題としたが、両方大切であるという前提の押さえが足りず、片方が無かったら、という極論になってしまった。また、価値的な論題であることから、児童によって定義が異なり質問や反論といったやり取りがかみ合わなかった。2回目は難易度を上げ「コンビニの24時間営業は必要である」という政策的な論題とした。情報が足りないと考え、資料を用意したが、資料を読むことに時間がかかり、資料の情報を根拠として主張することが上手くできなかった。

4年生での体温計の取扱説明書を扱った学習を生かし、立場や役割の「取扱説明書」を作成した。それぞれの立場や役割について理解を深めるために討論会を行い、その後「取扱説明書」を作成させたいと考えた。しかし、「取扱説明書」を作成することを単元の途中で伝えてしまったため、「討論会をする」と「取扱説明書を作る」という2つの目標ができてしまい、焦点化できずに混乱した児童がいた。授業実践②③において、課題を焦点化できるよう改善を図る。「取扱説明書」の作成では、繰り返し自分の立場や役割についてグループで話し合ったことで、特徴や注意点などを付箋にまとめる際、児童は意欲的に取り組み、討論における立場や役割への理解を深めていた内容のものがあつた。付箋は立場や役割ごとに模造紙に貼り「取扱説明書」として完成させて掲示し、他の立場や役割を担当した児童も共有できるようにした。

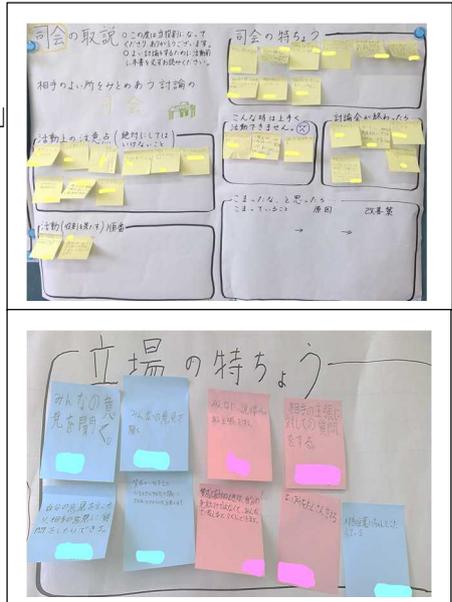


図2 作成した取扱説明書

(3) 話し合うために必要な言葉の提示

メモを取ることは話し合う上で大切な手段である。5月の「意見と理由を聞き取ろう」の学習を想起させながら取り組ませた。児童は討論会を経験したことで、メモを取る大切さを実感していたが、聞きながらメモを取ることは難しく、繰り返し練習させる必要性を感じた。

理由の言い方についても「意見と理由を聞き取ろう」で意見と理由を区別し聞き取った学習を生かし、理由を示す言葉を一覧にまとめて提示した。提示したことで、児童は主張メモを作成する際に活用していた。質問に答える時に活用していた児童もいたが、話すことに夢中になり、質問と答えの整合性が取れていない児童もいた。聞かれたことに対する確に答えることについては、引き続き接続詞や語尾に注意して取り組ませる必要がある。

質問の仕方については、「いつ、どこで、だれが、何を、なぜ、どのように」といった疑問詞の提示に留まってしまい、内容を深めるためや相手の考えを引き出すような質問ができるようになるまでには至らなかった。実践②においても質問の仕方については取り扱うので改善を図る。

(4) その他

話し合うための場の設定に課題があつた。2つの教室に分かれた討論会に全員が参加できるように5人編成の8グループにした。しかし、話し合う際に全員が同じように話す時間を確保するのは難しかった。また、机の並びを横一列にしたが、5台の机が並ぶと端の児童から反対の端の児童まで話し合うのは困難であり、机等の配置にも課題があつた。さらに、教室を移動したことで時間的な課題もあつた。40人という児童数を踏まえた話し合うための形態、環境の工夫が必要である。

5. 3 第2回実践検証

5. 3. 1 授業実践②（補助資料6）

単元名は「資料を生かしてポスターを書こう」とした。

単元の目標は次の通りである。

- ・情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことが

できる。

〔知識及び技能〕

・引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕

・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。〔学びに向かう力、人間性等〕

言語活動は、インフルエンザの予防を呼びかけるポスターの作成とし、教材は「資料を生かして考えたことを書こう」（東京書籍）である。

対象学級は、本校の第5学年1，2組80名である。

4年生までに身に付けてきた「B書くこと」の資質・能力は2つある。1つ目は相手や目的を意識し、集めた材料を比較したり分類したりし伝えたいことが明確になるよう新聞にまとめること、2つ目は自分の考えを伝えるために、考えと考えを支える理由や事例との関係を整理し書くことである。

本実践は5時間扱いとし、1時間目でポスター作りに必要な資料の読み取り方を理解する。2時間目で資料を活用した文章の書き方やポスターの構成から情報と情報との関係を理解する。3時間目でインフルエンザの予防を呼びかけるために効果的な資料を選び、ポスターの構成を考える。4時間目はこれまでの学習を生かし、インフルエンザの予防を呼びかけるポスターを書く。5時間目で書いたポスターを見合い、友達と話し合うことで、自分の文章のよさや課題に気付き、さらによりよいポスターを書こうという意欲を高める。繰り返し段階的に学習をすることで、資質・能力を育成できるように単元の構成を組み立てた。

書くことは個人の学習になりがちであった。書くことにおいても話し合う活動が有効であることを児童の必要感や有用感、ポスターの完成度などから検証していく。

5. 3. 2 考察

(1) 単元の構成と学習過程の工夫

教科書では、海岸の環境を守ることを呼びかけるための文章やポスターに、図表や写真などの資料を活用することを学ぶ。本単元では、教科書の資料の読み取り、資料を活用した文章の書き方、ポスターを書く際の資料の選び方を学んだ後、インフルエンザの予防を呼びかけるポスターを作成した。本単元では、資料の活用に特化した学習過程を組み立て、身に付けた資質・能力を発揮する場を作り、繰り返し段階的に学習できるようにした。その結果、資料の選び方、資料の位置（順序）、資料の関係づけ（つなげ方）、資料の解釈（内容）を意識してポスター作成に取り組み始めた。ポスターを作るための話し合う活動であったことから、児童にとって必要性があった。教科書の学習の手引きを生かした、自分なりのポスターを作成するという単元の構成を考えたことで、繰り返し段階的に指導することの大切さ、その方法を知ることができた。他の教材でも活用していきたい。

(2) 学習課題・発問の工夫

ポスターを見せる相手を全校児童または保護者としたことで、相手を意識したポスターを作成できた児童がいた。一方で、書くことにおいて大切な目的や相手意識、構成など、押さえることが多く、重点的に指導すべきことを定められなかった。その結果、内容がぶれてしまったポスターがあった。児童の実態に合わせることで、重点的に取り扱わなければいけない指導事項とのバランスを上手に取る必要がある。第3時の資料の選択と位置の決定の際には、自己決定の場である「オーダーシート」を使って、話し合う活動を行った。「オーダーシート」に記入してから話し合う活動に取り組んだことで、自分の選んだ資料については理由も説明できていた。一方で、互いの説明を比較して、考えを広げたり深めたりする場面では、「オーダーシート」の裏面の指示だけでは情報不足で戸惑う児童も見られた（補助資料7，8）。

(3) 話し合うために必要な言葉の提示

4つに分類した話し合う活動の方向性【交流】【まとめる】【問題解決】【広げる】を提示した後、話し合う活動に臨ませるようにした。【広げる】に関して、授業実践①の学習を振り返らせ、方向性を確認した。今回はポスターを見せる相手がいることから、相手の立場になり質問し合うこ

とが、分かりやすいポスターを作り上げていくことにつながることを意識させた。

(4) その他

インフルエンザの予防を呼びかけるために活用した非言語資料は、情報を読み取る資料としては課題があった。今回、準備した非言語資料は分かりやすさを重視したことで、読み取れる情報が少なく、科学的な根拠に欠けていた。また、インフルエンザやその予防に関する予備知識の必要性があり、保健の授業と関連させるなどの配慮も必要であった。

5. 4 第3回実践検証

5. 4. 1 授業実践③（補助資料9）

単元名は「表現の工夫について考えよう」とした。

単元の目標は次の通りである。

- ・ 比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。 [知識及び技能]
- ・ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の工夫を考えたりすることができる。 [思考力, 判断力, 表現力等]
- ・ 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。 [学びに向かう力, 人間性等]

言語活動は、学んだ表現の工夫について1つ選び、解説文にまとめることとし、教材は「注文の多い料理店」（東京書籍）である。

対象学級は、本校の第5学年1, 2組80名である。

4年生の「ごんぎつね」の学習では、中心となる人物と他の人物との関わりを考え読みを深めた。

本実践は9時間扱いとし、1時間目で「注文の多い料理店」を表現の工夫に着目して読み、見つけた表現の工夫について解説文を書くことを理解する。2時間目で反復や比喩表現、擬態語から、戸の言葉の解釈の間違いに気付いた紳士たちの気持ちを想像する。3時間目で戸の言葉の意味を遡って吟味し、戸の言葉の仕掛けに気付く。4時間目で不思議な世界に入り込む前の叙述から2人の紳士の性格や考え方を想像し、戸の言葉に振り回され戸の言葉を都合よく解釈してきた様子と統合し、紳士の人物像に迫る。5時間目で比喩表現や紳士の言動から物語全体を通した紳士の変化を捉え、人物像について理解を深める。6時間目で不思議な世界への入り口と出口となる一文から物語の構成を捉え、その一文に使われている反復表現や擬音語の効果を考える。7時間目で自分が一番説明したいと考えた表現の工夫について解説する文章にまとめる。8時間目でそれぞれの解説文について紹介し合い、自分の考えを広げ、解説文に修正や加筆を行う。9時間目で宮沢賢治の生き方や他の作品に触れ、再度、広げ深めた「注文の多い料理店」についての自分の考えを文章にまとめる。

「C読むこと」の学習指導においては、読みを深めるために話し合う活動は特に重要である。これまでの4つに分類した話し合う活動の方向性を意識させつつ、表現の工夫とその効果について理解を深められるようにする。解説文や感想文を書くといった言語活動において、書いた文章を共有し、自分の考えをより効果的に表現しようとする意欲を高める。読みを深められるように繰り返し段階的に表現について学習することで、資質・能力を育成できるよう単元の構成を組み立てた。

5. 4. 2 考察

(1) 単元の構成と学習過程の工夫（補助資料10）

表現の工夫に特化した指導とし、児童にも意識させてきたことから、時数を重ねるに従い、反復表現や比喩表現、擬態語といった表現技法に着目し、その効果を考えられるようになってきた。第2時で、紳士が戸の言葉の意味を都合よく解釈していたことに気付いた場面を取り上げたことで、物語の全体像を掴ませることができ、次時以降の読みを深める働きを担った。また、初発の感想では、戸の言葉の意味について気になっていた児童が多く、最初に戸の言葉を取り上げたことは話したいという意欲を高めることにもつながった。解説文では、見せる対象が昨年学んだ6年生であることと、表現の工夫について書くということを見学は意識して、物語を読むことができた。

(2) 学習課題・発問の工夫

表現の工夫に特化した学習課題，発問，それに対する振り返りを行った。第3時では，まず自分が違和感を持った1枚の戸の言葉に注目させてから話し合わせたことで，友達の意見によって他の戸の言葉にも注目することができた。そこで，新たな気付きや疑問が生じたことは，その後の全体での共有，戸の言葉の仕掛けに気付かせる過程において効果的であった（補助資料11）。

(3) 話し合うために必要な言葉の提示

第3時では，自分が違和感を持った戸の言葉について話し合う前に，型を提示し，自分の考えをその型を使ってノートに書いてから話し合う活動を行った。型があったことで，型通りに話す児童もいれば，型を参考に自分の言葉で話す児童も見られた（補助資料11）。

(4) その他

第4時では，紳士の言動から紳士の人物像を想像する際に，会話文や様子から性格や考え方を判断することが難しかった。その理由の一つとして，語彙の不足が考えられる。本単元を通して，語彙を広げていくのだが，一つの言葉から連想したり想像したりすることができず，1年生から4年生までのさらなる読むことの積み重ねの必要性を感じた。

5. 5 教材開発について

授業実践①の反省から，言語活動には児童にとって身近な事柄を活用したいと考えた。そこで授業実践②では，養護教諭の協力を得て，インフルエンザの予防を呼びかけるために活用できると考えた非言語資料を用意した。非言語資料を活用して作成したポスターは，学級内で見合い共有した後，全家庭に配付する保健だよりに複数枚掲載した。さらに，保健室前に全員分のポスターを掲示した。

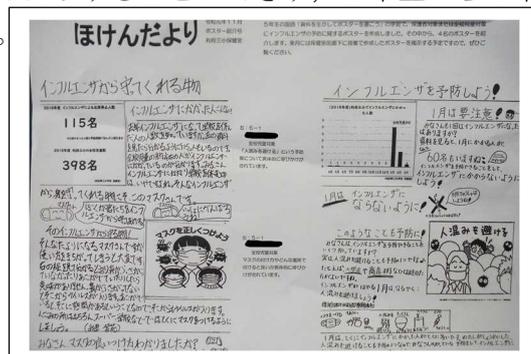


図3 保健だより

授業実践③では，解説文の用紙に本校で取り組んでいる「学級力向上プロジェクト」で活用している「ハガキ新聞」を活用した。さらに，昨年度「注文の多い料理店」を学習した第6学年児童に解説文を読んだ感想を書いてもらった。感想には「解説文を読んで犬の謎が解けた」といった気付きや「一文はもう少し短い方がよい」といった助言，「読み手が理解できる言葉を使っていて，読み手を意識した解説文が書けている」といった感想があった。単元の最後に書いた感想文は，図書業務員の協力を得て，図書室の前に宮沢賢治コーナーを作り，宮沢賢治の本とともに数名分を掲示し紹介した。

「ハガキ新聞」を活用した解説文は，図4図5のように「見出し，選んだ物語上の言葉や文，表現の工夫について解説する文章」の構成とした。図4の解説文は，最後の段落で「このように」という言葉を使い，オノマトペについて一般化し，まとめていた。図5の解説文は，戸の言葉に着目し，戸の言葉について紳士側の解釈と山猫軒側の意図を捉え，2つの意味に捉えられる戸の言葉の効果について考えたことをまとめていた。表現の工夫に特化した指導をしたことで，複数ある表現の工夫の中から自分が解説したい表現を1つ選び，全員が解説文にまとめることができた。

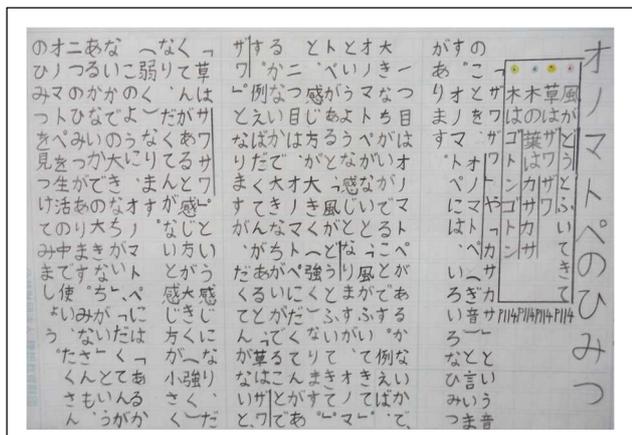


図4 オノマトペに着目した解説文

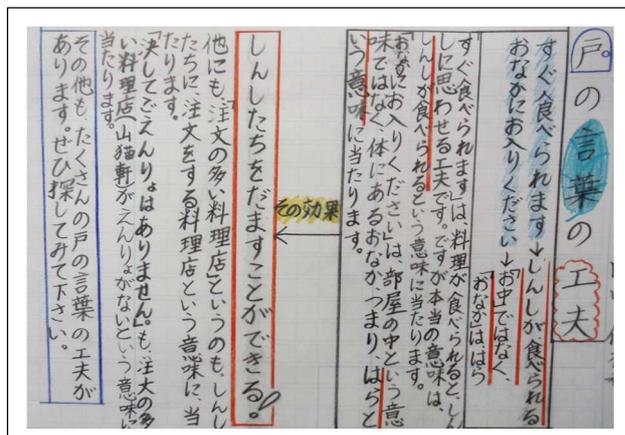


図5 戸の言葉に着目した解説文

以上のように、教材開発を行ったことで、保健や読書といったことへの関心を高めることができ、学んだことを学校生活において活用する場を設けることができた。また、学級担任以外の先生方に協力していただいたことで、国語科の指導として特化した資料の活用、表現の工夫とは異なる観点についての考えを知る良い機会にもなった。さらに、児童には読み手を意識させる指導を行うことができたと考ええる。



図6 図書室前に掲示した感想文

6 研究のまとめ

6.1 研究の成果

本研究では、初めに「A話すこと・聞くこと」単元で、「話し合うこと」について学び、そこで身に付けた資質・能力を生かせるような話し合う活動を「B書くこと」、さらに、「C読むこと」の学習過程においても配置した。教師自身が話し合う活動を意識した単元を構想し、その学習過程を児童に示し毎時間繰り返し話し合う活動を行ったことで、児童は話し合う活動に抵抗なく取り組むようになった。児童の振り返りを見ると、言語活動を通して話し合う活動の有効性を感じる児童もいた。話し合ったことを基に、討論会の実施、ポスターや解説文の作成などを行い、教科書で取り扱う教材への理解を深めることができたと考ええる。また、3領域の単元を構想し継続して実践したことにより、どの領域においても指導事項を特化し、繰り返し段階的に指導していくことが児童の意欲を高め、話し合う活動を充実させ、学習内容の理解を深めていくのに効果的であることを実感できた。繰り返し段階的に言語活動を設定するに当たっては、児童にとってより身近な題材を取り扱いたいと考え実践を重ねたことで、他領域や他教科と関連させ、指導していくことの重要性を改めて実感できた。さらに、3領域の学習指導案をそれぞれ作成したことで、他学年や他教材において単元の構成を組み立てる際にも活用できると考える。

6.2 今後の課題

4つに分類した話し合う活動を、単元を通して取り入れたことで、課題が明確になった。授業実践②の非言語資料や授業実践③の「注文の多い料理店」のように共通の教材について、児童は目的に応じた話し合う活動をできるようになってきた。しかし、授業実践②の自分の書いたポスターについて話し合うことや授業実践③で書いた解説文や感想文について話し合うことといった、共通の教材ではなく、自分や相手が書いたものに関して共有する際、それらの内容をよりよくするために話し合うことができなかった。異なるものを共有する際の話し合う活動について、手立てを講じる必要がある。

効果的な話し合う活動を行うには、話し合う活動の進め方を確認し、話し合う目的を伝え、話し合う活動の方向性を示す必要がある。授業の中に、適宜、話し合う活動を取り入れ繰り返し行う中での成功体験から、話し合う活動の有効性を実感させることも大切である。発話記録からどう話せばよいか分らず、自分の考えを表現できない児童が見られたことから、話し始めの言葉や相手の意見に自分の考えをつなぐ言葉、友達の意見を聞いた後の質問の仕方などを指導し、聞き合う態度を育成する必要もある。単元の構成や学習過程の工夫、提示するモデルや使えるようになってほしい言葉をさらに吟味していく。その際、話し言葉と書き言葉の違いにも留意できるようにしたい。

本研究を進めるに当たり、研究の成果として、話し合う活動の取組において有効だと考えた事柄についてサポートブックとしてまとめたいと考えていた。今年度の第5学年への授業実践では、単元を通しての話し合う活動を取り入れた指導、3領域や他教科との関わりを意識した指導を提案することができた。一方で、今年度の第5学年への指導につながる第1～4学年への授業実践や今年度の学習を活用する第6学年への授業実践は行えず、系統性を意識した指導の充実には至らなかった。また、本実践から明確になった共有する段階における課題に対して、新たな手立てを講じる必要がある。さらに、3領域における指導の全てを共通の手立てや視点で括りまとめることは難しく、各領域の実践をそれぞれ深めていく必要性を感じた。次年度の実践で提案、改善できるようにし、それら次年度

の実践も合わせて、学年の系統性と共有段階の手立て、各領域の実践に関しても提案したサポートブックを作成していきたい。

引用・参考文献

宮城県利府町教育委員会（2018）「平成30年度 教育要覧 利府町の教育」

中央教育審議会答申（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm

文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」

文部科学省（2017）「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」

細川太輔・北川雅浩（2016）「ペア&グループ学習を取り入れた小学校国語科『学び合い』の授業づくり」

井上一郎（2008）「話す力・聞く力の基礎・基本」

秋田喜代美（2007）「改訂版 授業研究と談話分析」

佐藤明宏（2012）「国語科研究授業のすべて—教材研究・指導案・授業実践—」

阿部昇（2015）「国語力をつける物語・小説の『読み』の授業—PISA読解力を超えるあたらしい授業の提案—」

図表等の許諾について

図1は意識調査結果、図2は児童が書いた付箋、図3と図6は児童のポスターや感想文を掲載したもの、図4と図5は児童が作成した解説文である。所属校校長と相談の上「氏名は掲載しない」という条件で資料として活用することとし、図2から図6は児童の保護者にその趣旨を説明した上で許諾を得られた児童の作品のみ掲載した。